第 10 号

昭和44年3月

会　報

発行　北海道高等学校
教育研究会事務局

札幌市伏見町1872の4
札幌旭丘高等学校内
電話 56 — 1221番

ごあいさつ

本会が設立されて6年になります。会の趣旨がだんだんと理解され、年々会員の数も増し、年一回の研究大会の参加者は2,350名になんなんとし、研究紀要の発表者も130名をこえました。内容も各教科部会のご苦心により充実しつつあり、紀要の研究発表も希望が殺到し質的にも深まりつつあります。各会員の心の持ち方が落ちついた取り組みを見せはじめてきた証拠だと思われ、うれしい次第です。教科研究の大切なことを痛感します。

最近読んだ話ですが、東京都立の某高校の先生が、生徒たちについて調べたところ、ほとんどの生徒は、高校に入学したことは良かったとし、それは友人にめぐりあい、人生の見聞をひろめ、自分の可能性を自分で確かめうるからだとしながらも、教師に対する敬愛はおろか、まったく信頼感を持ち得ないと断言する生徒が全体（3年生の170名）の37%にも及んだとのことでした。その先生は、生徒の多くは、教師不信の理由として、教師の不勉強、準備不足、情熱のない授業、魅力のない講義などをあげているといっていました。そして真の教育の危機は、教師自身の教養、そして授業の内容的貧因にこそあるのではなかろうかというのです。まことに痛い話ですが、自分の実力に対する謙虚で真剣な反省が必要といわれれば、常に何人にも妥当することと思われるのです。

東京へなぞ旅行して、雑踏の中で感ずること、自分は一片の木の葉のようだ、と。人は多いが無縁である。とたんに寂しいと思う。語る相手がほしいと思う。そこで自問自答がはじまる。そこから自己の内面が広がり、深まりをもちはじめる。このプロセスは一見単純でいて一切を包含するように思うのです。疎外されているということは、外から来るよりは、より本質的には内から芽ぶくのであります。根源は自身の中にあるように思えるのです。環境のせいにしてしまうのは自己をいよいよひよわにし不幸にするだけだと思います。人間の怠惰、ずるさ、劣等感、無能、虚栄などを不問にしてはならないでしょう。自己の若いエネルギーを大切にする心構えこそ、自主独立の基本なのだし、高校生と共に生きる私どもの指導のポイントになろうかと存じます。

第5回の研究大会で、国立教育研究所長の平塚益徳先生から「後期中等教育の諸問題」という講演で世界の教育動向と日本教育の行くべき方向について多くの示唆を与えられ、ことしの第6回研究大会では、京都大学の高坂正堯先生から、「転換期における日本の諸問題」という講演で、国際政治の立場から、広く世界政治の動向を鋭く分析されつつ、日本民族として真に選ぶべき道と教育のあり方について深い自覚を促されました。前者は熱烈に、後者は淡々として、夫々お二人の達識と人柄とからあふれいで、滴りおちるものがあり、日本の民族と国家の将来に対する愛情がみなぎっていたと思います。しかも国民教育に寄せられる期待感にみちみちていたことも忘れられません。小・中・高の一貫性ある教育といいますが、国民大衆の教育の一応の仕上げの意味をもつ高校教育の重大さを常日頃から一人一人の胸裡に感銘していきたいものです。

会員各位の一層のご自愛とご精進をお祈りいたします。

会長　長　瀬　米　蔵

◉日程第一日・全体集会

＜講　演＞

演　題　「転換期に於ける日本の諸問題」

京都大学助教授　高　坂　正　堯　氏

1968年と云う年は、今までの世界の秩序を形作ってきたものが崩壊し、新しいアプローチが必要となってきたといえよう。この年におこった事を踏まえて、現在の日本、又、世界のおかれている情況について述べてみたいと云う事で、以下の項目にわけて語られた。

1.　世界の情況、国際政治の構造

米・ソの影響力の低下により、日本をはじめ他の諸国でも自主外交とか、独立性の回復を求める動きが出てきた。これは、米・ソの平和共存の体制、テクノロジーの発達による各国の相互依存関係の強化、米・ソや他の諸国のベトナムへの援助の失敗等が原因で、国際政治においては、軍事的でない側面が重要となってきつつあるが、これが影響力の低下を生じているわけである。然し、軍事的には、依然として米・ソが優越であることを考え合わせて今後の日本の立場を考えると、

㋑　日本が今後独立の外交、安全保障を考える時、米・ソの軍事的関係を念頭におく事。

㋺　相互依存関係から、自主外交の一つの可能性として、ソ連東欧の友交をすすめるというアプローチが容易になった事。

㋩　相互依存の中でしか生きられぬと云う事を認識した上で、障害―特に日本人の心理的構造である西欧への愛憎コンプレックス―を取り除く事。

㋥　経済協力―金銭物質だけでなく相手の人間に対し如何なる刺戟を与えるか―と云う事。異なる考え方、異なる文明の人々との接触の仕方を覚える事。

2.　国内の情況

国内の大きな出来事は学生騒動で、これを称して黄色の信号が我々の文明社会についたと云うわけで、例をフランスの5月危機の特徴について話をすすめ、日本も大体同様の傾向があるとして、特に学生の動きの問題点を次の様に指摘された。

1.　経済発展を当然とする考え方

2.　官僚制の破壊だけを目的とする考え方

3.　小さな幸福を求めて働くという今までの倫理に反抗潮笑する態度

等の点で学生運動は寄与すべき面を持ってるとは思えない。しかし、今までの政治がうまく行われても、人々は幸福になれず、社会主義のビジョンも現代の問題に対しては、寄与する事が出来ない。と云う事を示した点で意義がある。このように、コンベンショナルな政治がうまく行われても、なお人々が不満をもつのは何によるか。

それは、我々の社会の動きを管理する能力の増大する反面、立派な管理体制が出来ると云う事が中央集権化専門化を招くから「参加」は、ますます難しくなると云う事であり、これは今後10年間の課題であると言えよう。

此の巨大で複雑な社会をどう運営していったらよいのか。

1.　政府は中央集権の習慣をやめ、分権を与え、末端にも決定権を残す

2.　日本人に著しい政府依存の態度をやめる

3.　政府は明確な発言をすべきである

4.　国民は、複雑な相互関係の社会、高度産業社会を分析していく態度をもつ

其の他の問題として、我々の豊かな社会での生き方、年令の伸びの問題等、この2、3年間に徐々にわかってきたが、どういう社会が出来上るかわからない。これが転換期なのだろう。こういう問題に真剣に取り組んでいる間に、今後の社会の形も徐々に定まってくるものであろう。唯単に政治だけでなく、教育とか、生き方とか、そういうものは全体に及ぶような変化が必要であることは間違いない。

＜講　演＞

演　題　「開拓百年と北海道の野獣」

北大名誉教授　犬　飼　哲　夫　氏

我々の住む郷土北海道は島国としても広大な領域を有し、その中に豊富な天然物を持ち、世界的にも有数な魅力あふれる土地がらと言える。特に知床、日高山系等は北海道の秘境性を示すものとして誇り得よう。従ってこのような立派な北海道の自然物は子孫の為にも残していってやりたいし、また我々は残すべく努力すべきであろう。

所で本道開拓百年を迎え、その間開拓と同時に山野に居住していた野性の動物達もいろいろとそれにつれて変化をしいられてきた。このような場合変化の記録等はややもするとあいまいになるのが普通だが、北海道の場合は幸いにして残されてきたことは大変嬉しいことである。

さて、百年前の北海道には3万人程のアイヌ人が平和な暮しをしていた。それができた理由として

① 島国であること

② 自然資源の豊富なこと――があげられる。

彼らが動物資源として「鮭」を利用していたことはよく知られているが、それは秋から冬にかけての3カ月くらいのもので、もっとも頼っていたのは「えぞ鹿」であった。

○「えぞ鹿」について――日本鹿の地方型であるえぞ鹿は数多く簡単に捕ることができた。道内の地名に残っている「鹿落し」はその狩猟方法の容易さを示し、「鹿越え」は多くの鹿が通過してできたコンクリート状の道路から来たものである。尚、このように沢山いた鹿がへった理由としては ① 近代的猟法のため ② 大雪のため……と考えられる。この結果はアイヌ人の生活の困窮となって現われ、ある者は保護政策の下で漁業方面に、ある者は農業に転向させることとなった。更に「えぞ狼」の人畜に対する被害となって現われてもきた。この鹿の減少に対する対策として、明治22年禁猟、同36年解禁、大正9年再禁猟とくりかえされたが、昭和5年頃にはほとんど見られなくなった。しかし大正時代末に鹿をふやす計画があったりして、その後日高、十勝方面で数多く見られるようになった。現在解禁（11月～1月）以外の時期に密猟多く心ある人々のひんしゅくをかっている。このような国の宝は大切にしてゆきたいものと思う。

○「えぞ狼」について――アイヌ人は彼らを神聖視して猟の神様として敬っている。これは狼の猟のうまさからきたものと思われる。鹿の減少の結果、彼らは食物として本州輸入の牛馬に害を与えて行く。その結果、狼退治が強化されていった。その対策の記録も精しく残っている。一番効果的な対策は毒薬によるものであり、明治10年に狩猟を奨励して当時の金で奨励金は7円)、同21年にやめるまで相当な実績があがった。そして同28年に3頭捕たのを最後として狼の姿は再び我々の目にふれることはなくなったのである。

○「熊」について――狼と同時に狩猟を奨励されたが、その効果はあがらず根強く現存してきた。この理由としては次のように考えられる、① 狼は集団で活動するが、熊は集団で暮すことを好まない。それ故一度に退治されなかった。② 冬眠することができる。③ 新しい食物に対する適応性が強い。以上の理由に依り毎年相当数の狩猟にあいながら減少することなく、500頭平均の数で命脈を保ってきたものと推定される。北海道の60%は山岳地帯であり、その環境が変化しないかぎり、今後とも熊の数には大きな変動はないと思われる。

＜補足として＞

南極の「太郎」（日本の Wonder Dog として有名）が生き残った理由について述べると、その理由としては、

① 寒さに耐えることができる（−41℃まで）

② 絶食を長く続け得る（実験では15日間）

③ 人に頼らないで生きてゆける

④ 方向感覚にすぐれている

などがあげえよう。

◉日程第二日・教科別集会

＜国語分科会＞

「創作を中心とした作文指導の一方法」

函館中部　石　原　団　三

ほとんどの場合、作文指導は、高等学校学習指要領「現代国語」の「指導計画作成および指導上の留意事項」の(5)にある内容の如く、感想文、要約、抜萃等に限られているように考えられる。しかし、作文を主とする学習である以上、そこには当然創作力を中心とした作文というものが考えられると思う、と云われ、創作を中心とした作文指導の必要性を強調された。そして、その方法としては、「現代国語、古文を問わず、教材として学んだ短歌、俳句、詩等から自由に選択させ、それを内容やテーマに余りこだわらず、自由に物語に発展させる方法」としてとかれ、その上、生徒の実作例を数種類あげて具体的に説明を加え、「創作とはいつでも何か手がかりを与えれば、それほどむずかしくなく、生徒も実際に書いてみて、作文能力のあることを自覚するにいたる。それがやがて喜びつつ書く姿勢に向わせるもとになる」と結論された。

「生徒の実態と作文指導」

常呂　斎　藤　公　秀

先ず初めに、本校は2学級編成という小規模校であり、入学生の中には与えられた教育課程さえ学習して行く能力もない、従って意欲喪失もはなだしい生徒が多いという特殊事情を述べられ、このような困難ななかでの作文指導法を披歴された。

即ち、生徒の入学時における学力を分析し、その実態を把握した上で、文章を書くこととは程遠いとさえ考えられる基礎的なことの指導にこそ日頃留意し、指導をすすめていると言われ、

イ 常時国語辞典を携帯させ、辞書をひく習慣をつける。ロ 学級日誌の点検。ハ 短文の反復練習。ニ 漢字の小テスト、筆順指導。ホ 主題のまとめ、古文口語調の指導。ヘ 作文作業における題のあたえ方。ト 読書感想文の発表。チ 就職希望生徒の作文指導。

などをあげられ、その作文指導に対する熱意を示された。

最後に国語国字への無関心という、より一般的風潮をかえりみ、文章をよみかくことの教育がなおざりにされてきた事を反省し、文章語法を通じて思考力判断力の養成に力を入れて行きたいということで結ばれた。

「作文に関する実態調査について」

旭川商　藤　原　　寿

この研究は、生徒諸君が作文に対して、どのような関心なり興味を示しているか、またそれらの関心なり、興味なりが存在する背景を考えて見れば、多少なりとも作文に関する生徒の実態を知ることが出来るのではないか、というところからはじめた。そして、このような結果こそが、私の今後の作文指導上の材料として立派に役立ち得るものと考えられる。

上記の要旨のもとに、第3学年生徒（男—145名、女—195名）にプリント1枚半項目数17にわたり、H・R担任の協力のもとに調査をされ、それを集計表としてまとめられたものを持参され、いろいろと細部に就いての説明があった。

最後に、発表者の感想として、最近の社会のムード、即効的な生活環境への享受等に依り、生徒達はしらずしらずに苦労をいとうようになってきており、それが作文の面にも影響として浸透しているようだ。この点にも作文指導の困難性の一端があるだろうとされ、かてて加えて校務の繁雑な面の影響性も見のがすことの出来ない点をも上げて結びとされている。

「要約文における表現の実態」

札旭丘　細　田　康　弘

初めに、作文活動とは「ノートにメモをとること、感想を書きこむこと、語彙力を養うために短文を作ること、長文を要約すること、主題を考え書きとどめること、短文の練習等々の作文力を養うための基本的作業の一切を含めたもの」と定義づけされ、こういった観点から、要約文による短文練習の試み、要約文を表現する立場から生ずる派生的問題ということを探って見ようと言われ、その実践指導を示された。先ず、実践方法の細部にわたる提示があり、次に結果の過程を豊富な用例や明細な表を駆使して展開されていた。（配付の資料参照）

結局、問題点としては、（1）文章を読みとる力に乏しい。（2）表現力に乏しい。（3）思考をまとめる力に欠けている。（4）語彙力、漢字の力に乏しい。（5）句読点があいまい、の五点が浮かびあがり、その対策としては、

イ　短文の機能的学習による表現力の体得

ロ　感想文、生活文による読解力、叙述の構成の体得

の2点の必要性が痛感されたと説かれて結びとされた。

＜講　演＞

「作文指導について」

国立国語研究所　輿　水　　実　氏

1. 作文教育の困難性（序論）
2. 高校で書かせるのは説明的文章を主とすべし
3. 作文教育の中にもっと再生産的な作文を取り入れるべきだ
4. 作文の根本になるものの見方、考え方を養うのに何をなすべきか
5. 作文教育に秩序をつけるために実作だけでなく作文法の指導必要
6. 作品の客観的評価と作文能力の検査にどんなものがあるか

上記の6項目の大綱のもと、各項目毎に、更に細部にわたり米国の教育事情等の豊富な紹介、自著の紹介、現在の研究段階の説明、研究所員としての立場からの考え方等、該博な知識を縦横に駆使されて、満堂の聴衆を魅了しなが

ら時間一ぱいにわたる講演であった。

＜社会（倫理・社会）分科会＞

余市高斎藤氏の発表「倫社教材の効果的取扱い」：高校倫社の中心は哲学よりも倫理であり、また、目標は、問題解決よりも、公正な判断力・批判力の養成にある。教材の末梢的事項の切り捨てと同時に、思想の欠点や限界を示すことによって、生徒自身の発展を促す学習を実現できよう。思想の根幹は、純粋な学術用語を用いて、学問的論理を明確化した方がよい。方法論としては、比較哲学的な試みも良かろう。北見北斗高中村氏の発表「倫社の授業展開」：北に斗高商業科では、生活に目標がない、愛情に飢えている、感情面が先行し倫理的思考を拒否する、といった傾向ある。この対策として、家庭学習を重視し、発表やレポートを義務づけた結果、考える訓練と共に、考えをまとめる時間的余裕を持ち得た。討論の総括：精撰と切り捨てとは別。生き方を考えるにも、認識の問題が先行する。倫社とＬＨＲとの関連づけのために、ＨＲ計画作成段階で倫社教員が加入する必要がある。分科会講演、北大並木助教授「受験生の心理」：受験が頭から離れない者７割以上、自殺思考経験者２割５分という状態の下で、受験生の多くが自律神経失調を来たし、身体的異常を訴える。が、実際に病気である場合は少く、多くは、2〜3回面接して心の負担を取除いてやると良くなる。〝自分の力こそ自分を救う〟ことを自覚し、生活の方向づけが出来ればよい。高校倫社で取扱う事柄として、自己及び周囲の要求水準の適否、環境の整理、自律の精神、対人関係の望ましい処理、生活目標の確立などの問題が指摘されるが、これらの学習指導を通じて、受験生の心身の健康―幸せな人生―に資することの出来る場面がかなり多くあると思われる。

＜社会（政治・経済）分科会＞

＜研究発表＞

（Ⅰ）「主体的問題解決能力を育てる課題学習――中小企業問題をいかに指導したか」

夕張東高　幅　　一

（Ⅱ）「経済単元における統計資料等の効果的取扱いについて――日本の農業問題を例として」

札幌月寒　織　田　秀　秋

＜討　議＞

上記発表に関連して、学習指導の近代化に対処した指導方法の推進について討議した。得られた結論は次の諸点である。

ⓐ　「経済」単元では諸資料の活用が肝要である。

ⓑ　「経済」単元では、とかく量的把握に傾きやすいが、もっと質的側面に目を向けて把握すること。

ⓒ　具体的事例は、なるべく地域社会に密着したものであることが望ましい。

ⓓ　統計資料からは、事象の一般的傾向や、平均化されたのは把えやすいが、その底に沈潜する事象の特殊性の把握に留意する。

ⓔ　統計数値は、できるだけ簡略化し、視覚に訴えるようなグラフに焼き直して扱う。

ⓕ　統計資料では、単なる事象の比較や、年代的な変遷のみに止まらず現在の問題点と将来への展望にポイントをおくこと。

以上は、結局のところ「いかなるねらいのもとに、何を、いかに教えるか」ということがわれわれの研究課題であろう。

＜講　演＞

「日本経済の諸問題」

北海道大学教授　早　川　泰　正　氏

戦後日本経済の巨視的分析の中から、高度成長経済の準備期、展開期「転型期」の三段階の発展過程の説明と、各期の特質が詳説され、今後の安定成長策の問題点を論じられた。コスト・プッシュ特に賃金コストの上昇にともなうインフレ対策と、国際経済環境の大きな変化に対処することが特に政策の核心となることを論じられた。

＜社会（日本史）分科会＞

＜研究発表＞

坂井一男――高校日本史の授業では生徒に主体性をもたせた自主的学習方法をとるべきだとして「郷村の成長と土一揆」を教材とする課題学習の実践報告をされた。生徒に与えた課題は、① 郷村の成長過程、② 農民にとっての結合の必要性、③ 郷村の構造、④ 土一揆の地域・要求事項、⑤ 主な一揆の性格の５つで、その他９つの史料を提示した。その結果、生徒の発表には教科書や史料を用いて創造的思考をこらし問題解決にとりくむ姿、或いは耳を傾ける生徒の側にも教師の一方的講義方式と違って友人の発表に関心を示し、積極的に学習活動に参加する姿がみられ、

全体としていきいきとした授業が展開された。しかし発表の内容はこの時代における生産力の高まりが名主層の分解をおこし、ひいては農村構造を変質させるという理解が不充分で、指導目標の一部が生かされずに終った反省がなされた。

越野孝――安芸国の豪族小早川氏にみられる一族一揆を惣領制とからみ合せ、極めて実証的な研究報告をなされた。以下その要旨。鎌倉時代の西遷武士小早川氏は内部に沼田本宗家・椋梨氏（有力庶家）・竹原氏（有力庶家）と分立土着し、これら三家が相互独立的に南北朝動乱期を迎えた。やがて室町期に入るや幕府の御家人統制策に直面し一族一揆の結成をみる。即ち幕府は小早川一族中、沼田本宗家と竹原氏に対して「惣領職」を付与したのであるが、惣領職付与という幕府の強力な保護を背景に沼田本宗家は直ちに従来自立的であった庶家の被官化にのり出した。この被官化工作に対して庶家の多くは一揆した。しかし乍ら一揆した庶家のねらいは本宗家の存在を否定することにあったのではなしに、その被官化（封建的主従制）をきらってのことであって、本宗家を中心とする一族の共和的結合は維持続けようとしたのであった。

＜討　論＞

坂井先生の実践報告について、いくつかの問題点が指摘された。例えば課題学習の有効性は高く評価しつつも、進度との関係、教材精選の問題、課題発表後の処理の問題等々、いずれも日常悩みの種となっている問題で、充分な解決策にまで達することは出来なかったが、「高校教師は欲ばりすぎる」との発言は大いに考えさせられる意見であった。つまり中学校の歴史教育との関連を深め、その土台に立って高校日本史は何を為すべきかを吟味するという、古くて新しい課題である。

その他具体的内容について、「生産力の発展」の説明不足、土一揆と幕府権力との関係等々についての質疑応答がなされた。越野先生の発表について活発な討論のなさけなかったことは残念至極であるが、ともすれば教育の場にのみ沈潜しがちな我々に歴史教育とあわせて学界に充分寄与する研究活動をされていることの刺激を与えて下さったことは大いに感謝致したい。

＜講　演＞

網野善彦先生――「中世の農民活動」と題して、極めて具体的に中世農民の行動及び意識を浮彫りにされ、我々の中世に対するイメージを豊かにしていただいた。以下その要旨。中世の農民として何をとらえるかについては史料の残存性からみて、荘園領主側のとらえる平民・百姓を念頭において考える。次に活動の具体的現れを強訴・逃散・一揆のなかに見出し乍ら、例として阿氐河庄・太良庄・矢野庄の百姓の動きを検証した。その結果、一般に考えられている弱い立場におかれた百姓、被圧迫者としての百姓というイメージは転換の余地が生じてくる。つまり当代（鎌倉中期～室町期）の百姓の行動にはたえず支配者との関係、就中支配者層相互の対立・分裂と関係があり、百姓がそれらを最大限に利用し、且つ実に功妙な動きを示している。そこには弱い百姓の姿はなく、鋭い政治的感覚を身につけた強勒な百姓の姿をより強く印象づけられる。

＜社会（世界史）分科会＞

司会者より従来歴史分科会として、一つであったものが世界史・日本史二分科会に分れた事情、又、今回はいづれも研究主題にもとづく教育現場での実践報告である旨の説明がある。以下簡単に報告の概要と印象を記す。

菊地守典――歴史地図帳と歴史掛図の併用により、地図概念地域認識を喚起することが、空転する理論よりもいかに歴史認識や思考力育成に有効な方法であるかとされ、イラン・イスラム世界の変遷を例として詳細に説明された。地図の利用はごく常識的なことではあるが、それを徹底的にかつ系統的に採用され、大きな効果をあげておられる報告は参会者に強い感銘をあたえた。

前野良――学習環境としては必ずしも恵まれていない一漁村において、世界史に興味をもたせるにはどうしたらよいか、と効果的授業法を模索された報告である。講義式教授法・スライドの利用・レポートによる主題別学習・発表形式等々いろいろな方式が試みられた。そして生徒の成績追跡調査や関心度調査で検討されたそれぞれの授業法の長短は、今後の歴史教育のあり方に多くの示唆をあたえた。

丸山恵照――生徒の学力をどうとらえるか、学力をふまえた上での授業方法の研究が必要であると痛感され、入試成績、図書館利用状況の詳細な報告がなされた。ことに学力の把握にあたって中学校教科書の研究が有効である点を力説された。又、発表形式、主題学習が歴史的思考力を育てる最適の授業形式であるとされながらも、講義式を好む生徒のアンケート結果は、指導法に再検討の要ありを示すものだとの指摘がなされた。

又、同時に主題学習の研究にあたっておられる稚内の清先生、教科ぐるみで日常研究をされている登別の矢野先生の実践が紹介され、あらためて研究交流の必要さを認識させられた。

三先生の報告はいづれも、限られた時間内で、歴史認識や思考力を育てる有効な授業方法を追求する意欲的な試みであったが、時間がなく充分の討議ができなかったことが残念であった。

午後は、「比較史と世界史」――中世ヨーロッパ世界史への一試論――という演題で北大の井上泰男先生の講演がもたれた。以下その要旨を記したい。

社会経済史の分野だけでなく、政治法制史の分野においても比較史研究が深められていることを紹介され、ヨーロッパ史に関しては、① 西ヨーロッパ偏重ではなく東西ヨーロッパを一体のものとして考える。② 単なる文化交渉史にとどまらず、有機的な同時代史としてとらえる。という二つの視点からヨーロッパ世界とイスラム世界の動的諸関係をヴィヴィドに描写され、全体的なヨーロッパ世界史像の枠ぐみを示された。即ち、ノルマン・マジャールの攻勢と同化、そしてイスラム世界との対立、この第二次民族移動期をキリスト教ヨーロッパ世界の成立期とし、十字軍を守勢から攻勢へ、ヨーロッパ世界の拡張への転機としてとらえる。そして15世紀、東のモスクワ大公国の独立、スペインのレコンキスタの終了をもって異民族の包囲から脱したとき、それは同時に、イスラム対ヨーロッパとしての統一が失なわれることを意味し、世界の商業市場をめぐって内部分裂を招く、というものである。

この壮大な構想は、参加者に中世ヨーロッパ世界史の明確な展望をあたえるものであった。なお質問に答えて先生から、10世紀ヨーロッパ史は非ヨーロッパ世界との関係のみならず、封建国家成立期として、又、生産力の飛躍的発展の時期として重要である旨の指摘があった。

＜社会（地理）分科会＞

＜研究発表＞

「高校地理教材内容の精選と実践」

札西定　森　貞　　司

教育の現代化、多様化の要求をどのように中に取り入れるかに視点をおき、適切な整理、精選をはかり、生徒の能力や実態に即した構造的理解と、総合的な観察力や思考力を養い自主性を高めること、学習過程の合理化、効率化を図ることこそ、それを実現することであるとし、そのための指導内容及び演習ノート等を提示して説明がなされた。

「地理教育における資料」

士　別　神　山　　健

ともすれば暗記科目として羅列的学習に陥りがちな地理教育を、「考えさせる地理」に、そして又、1年生でただ一つの社会科として社会への関心を呼びおこし、問題意識を持たせる地理教育をおこなうために、資料の持つ役割は大きく、その充実を考えねばならない。勿論、視聴覚器材も大切であるが、地理学習の本質は教師が日々生徒に口述する内容における資料にこそ、その力点を置かねばならないとの詳細な発表があった。

次いで質疑応答及び討議に入り、

① 地理授業における一番の困難点

② O・H・P、V・T・Rなど視聴覚教材の使用

③ 重点指導における単元の取捨選択について

などを中心に活発な討議が行わなれた。

次に講師の札教大奈良部教授（当初東京教育大浅香幸雄教授が予定されていたが都合で帰京された）より講評があり、午後も討議は活発に行なわれ、地図を有効に利用させ理解させるにはどう指導すべきか、又、補助教材、とくに視聴覚器材の利用などに論議がしぼられ、参加者より種々の実践例が発表された。

午後2時より、前日、札啓成高でＶＴＲにとるために行った東京教育大浅香教授の「地理教育における補助教材の活用」と題する講演を約1時間に亘って視聴したが、具体的に新しい新聞資料を用いて地理的思考力を高める教授法が説明され、深い感銘をうけた。

最後に札啓成高で使用しているＴＶのＶＴＲ器材の説明や取扱い方が披露され、又、札開成の16㎜映写機により新潟、東京間の天然ガス輸送パイプライン敷設のフィルムを観賞し、日程を終了した。

＜数 学 分 科 会＞

○授業研究―実践報告

砂川北　宮　川　行　雄

A講義が主となるとき、(1) 授業の始めに内容目標を生徒に把握させる。(2) 基本事項は強い印象を与える。(3) 授業の効果をチェックする。

B演習が主となるとき、バズ学習を実施し、自主的学習、成績下位者の成績が向上した旨報告。

○本校における理数科の現状と将来について

札幌啓成　瀬　川　真　一

○性格、教育課程、現状、将来について報告（理数科について）

函館東　大　平　殊　勝

入学者、学力、数学科の成績追跡、困難点等について報告。

質　疑　授業実践研究について

5単位で進度は後れないか、2年以後実施しない理由、グループの編成について質問、これに対して問題を精選、能力差が生じたこと、生活指導に重点を置く、グループは差が生じないように編成、時折編成替えをする等応答。

理数科について

文科系科目の成績が下っている、能率が上らない、生徒の負担が大であることについて質問、文科系科目が特に落ちて来てない。7時間目の授業は教室を移動させて能率を上げるようにしていると応答。

文部省大野清四郎先生より高等学校教育も国民教育となった。何を教えるかどの様に教えるかの2つの問題があるが、高校では後者の研究があまりなされていない。価値のあるものには生易しくないが、それを学習させるようにしなければならぬ。理数科については現代化と能力のあるものをのばすことを目的とし、普通科での理科数学と同じ目的でそれをもう少し深めると云う考えがあってもよいのでないか。理数科に入ったために大学に入れないと云うことは早計と思われる。

午後は13時より約2時間に亘って、文部省調査官大野清清四郎氏による部会講演が行われたが、最大の関心事だけに会場を埋めつくした会員も終始熱心に聴講、要旨次の通り。

「数学教育の現代化と新教育課程」

Ⅰ　改訂の必要性

イ）現行のものについての生徒の不消化

ロ）新しい時代に対処出来る能力の養成

ハ）進学率の上昇による国民教育化

ニ）進路、適性、能力に応ずる内容の多様化

ホ）大学教育との関係

Ⅱ　科目の構成について

イ）数Ⅰでは、A、Bに分ける必要がないかどうか？　分けないで弾力的な扱いをするか？

ロ）数Ⅱでは現行のⅡB→Ⅲに問題があるのでいくつかの類型を設け度いが……

ハ）応用数学では、数Ⅰは共通必修にしたいがどこから応用数学に分けたらよいか？

Ⅲ　中学の改訂案と現代化との関連

1）中学改訂の方針

いたずらに新しいものを取り入れないで、今までのものを新しい見方で見直す。

イ）数量、図形の概念及び原理法則など基礎概念の十分な把握を図る。

ロ）量的な集約、統合を図る。

ハ）学年配当を合理化する。

2）改訂新課程の取扱い内容

イ）数式　ロ）関数　ハ）図形　ニ）確率統計　ホ）集合、論理

数に強く、いろいろな物の見方が出来る様に、又、柔軟な思考力を養い、抽象的なものについての考え方も把握出来る様それぞれ考慮が払われた点について説明あり。

講演終了後、引続き活発な質疑応答に予定時間も超過ぎみ。最後に部会総会が開かれ、新部会長には引続き現上野部会長が選ばれ、他の新役員は部会長に一任、部会のテーマは継続を確認、部会の組織、会則等の早期完成を約して午後4時盛会裡に散会す。

＜理科（物理）分科会＞

Ⅰ　研究発表

札啓成　伊良原　国　雄

文部省著作になる現代化資料によると、現代化（教材の精選）指導法、教材の活用法を三つの柱としている。何れも重要な事であるが、資料の精神に則って指導案を作成し、実際に授業を行ない、指導法を点検し今後の指導法として適当であるかどうか検討を加えてみた。一例として、運動量と運動エネルギーをとりあげる運動量と運動エネルギーに同じ比重をかけて指導すると混乱を生じるので運動量に主眼を置いて展開する事にする。

展開の順序

① 運動量の学習　② 運動量保存則　③ 運動エネルギー保存則の検証

この中 ② についての指導案を本日展開してみる（以下次の実験を順次行なう。）

1. 爆発による台車の運動（教師実験）
2. 力学台車を用いた一次元の衝突（生徒実験）
3. スチールボールを用いた二次元の衝突（生徒実験）
4. 力学台車による一次元の衝突：台車にレンガを落す場合

評価について、実験報告書による評価、更に、上記実験によって当然理解さるべき問題の提起による評価がある。

Ⅱ 討　議

「現代化」という言葉の意味を中心として「概念についての教師のイメージと生徒のイメージの間にある差を、実験授業によってどの程度縮め得るか」釧路江南：櫃原「F＝mα」について、静力学で求める力を動力学に応用する事について疑問を感じないか」小樽潮陵：須藤「仮説実験のもつ意味について」在竹：（札北）等の問題提起について討議を行った。

最後に部会運営委員川井先生（札工）の挨拶があって閉会した。

＜理科（化学）分科会＞

(イ) 研究発表

「原子・分子の概念の化学史的導入法について」　　砂川北　神　尾　正　光

(ロ) 討　議

1. 溶解・原子量・当量・モル・同位体など基礎概念をどのように指導したらよいか。
2. 基礎概念を理解させるのにどんな実験をしたらよいか。
3. 新しい化学教育に対する提言。

＜理科（生物）分科会＞

研究発表

1. 研究発表者：北野敬典（砂川北）
2. 研究テーマ：生物の自由研究に関する考察――生徒の自主的活動で主体として――
3. 研究発表の要領とその要旨

印刷物に従って実践経過の説明、スライドとテープにより実況紹介の後、考察を加える。11年間の実践に基づく発表である。1年生全員に共同研究を実施させ、段階をふんで10月校内発表会とする。共同研究として、科学する態度と方法の体得の他に協力、責任感の涵養にも役立たせる。生徒の研究テーマは、生態・生理に関するものが多い。

4. 協議事項

ア　年間指導計画における「生態」単元の位置づけについて。イ　教科としての自由研究とクラブ活動との関連について。ウ　広範多岐にわたる自由研究に対する教師の指導態勢について。エ　授業における実験と自由研究との関連について。オ　評価の方法について。

5. 助言の要旨

鳥利雄氏（理科教育センター）ア　指導者の負担が過重になり易い。イ　自由研究の内容と教科書との関連づけ年間指導計画の中での自由研究の位置づけを考慮する必要あり。ウ　テーマ設定や展開過程を通じて、「研究」を安易に考える事のない様に指導する要あり。エ　結果よりむしろプロセスを重視し、批判を傾聴する態度育成の要あり。オ　設備に関しても公的予算の裏づけが望まれる。

塩川信氏（胆振地方教育局）ア　評価は、企画性、協同性などの5つ程度の柱に準拠したらよいのではないか。イ　自主研究を伸ばす行き方は望ましい。

＜理科（地学）分科会＞

理科全体部会主題「これからの理科教育はどうあるべきか」並びに副題「新カリキュラムに何を求めるべきか」「現状の教育の問題点をふまえて」に関連し、道理科センター古谷泉先生より42年11月の文部省合同教育課程研究会報告があって後、歌志内高大森勉先生の「気象教材の指導実践例について」の研究発表と質疑応答があり、続いて地学実習書編集委員会より44年度から改訂される北海道地学実習書の内容説明が行われた。その報告並びに研究発表要旨は次の如くである。

報告：教科の多様化は理解にも考えられて来た今日、新しく改訂される地学の位置づけやその内容の如何にあるべきかが未だ結論に達し得ぬ状態にあり、これは、又、教科の基本概念が、物理、化学の如く明確でない為にあり47年の新指導要領の発表に問い合わせるには、是非とも今年中に地学の基本概念の確立が必要であり、45年はその内容組

織の検討が成されて行く手筈になっている。

研究発表

中学に於ける理科の基礎学力は、全国的に低下していると言われているが、この点を充分に考慮して、生徒の理科学力の分析を行うと共に、生徒の実態に応じた段階的指導過程を経て、系統的学習が成されるよう、指導の目標や内容の精選をした指導計画が建てられて行かねばならない。そこで中学にてもある程度取り上げられている気象分野について高校に於ける指導の具体的実践例が報告された。これは、新聞に掲載される天気図を一年間連続整理する作業に始り、各気象要素をグラフ化し、その要素相互の関連性を考察させ、又、高気圧、低気圧の移動を調べ、且つ、地表天気図と高層天気図の相異と関連の考察をさせる。又、観測地毎に資料を整理して行く段階で資料の処理能力を養成し、各地の天気変化、気圧配置変化、気候変化等の関連を理解させて行く。

＜保健体育分科会＞

＜研究発表＞

① 学校管理下における本校生徒の外傷事故の原因分析について　芦別工業　荒井茂樹

○芦別工業高校の概況説明　○内容説明

② スポーツテストの考察とその活用　札幌旭丘　菅原道行

○旭丘高校生徒の概要とその特徴　○懸垂力についての実践研究

③ 保健指導の一考察（保健と生物との関連）　札幌東　佐々三男

(1) 理科「生物」の学習指導　(2) 「保健」と「生物」の内容の関連　(3) 「生物」記憶理解度調査　(4) 「保健」と「生物」の関連重複の実際

＜研究討議＞

① 体育の指導とからだづくり

② 体育・保健の各種測定結果の効果的活用

③ 自由テーマ

○他校の実践例を紹介　○グループ分けの基準をどこにおくか　○個人差について　○トレーニングの種類・回数時間について　○トレーニングの実施時期と方法　○主教材との関連性　○スポーツテストと評価との関連　○効果的な施設用具の使い方とその工夫　○調査結果の活用方法の工夫

＜まとめ＞

体力づくりは現在の生徒に極めて必要である。そのためにも縦の連なり（小学校～中学校～高校を充実し、一貫した体育指導をしなければならない。① 主たる教材に応じた体づくりにより生徒を指導。② 調査結果をいかに学習指導に生かしたらよいか。以上の二点が今後の課題と思う。

＜部　会＞

① 部会長の挨拶　川田正徳氏

② 事務局長挨拶　在間弘氏　事業経過並びに会計報告

③ 新役員の紹介

部会長……川田正徳氏　副部会長……清水達人、鳴海哲男　監事……遠藤忠、上野充夫

④ その他

○部会を分割し保健・体育を別々に行ったらどうか。　○実技研修も加えてはどうか。　○資料を予め支部に送付したらどうか。

＜講　演＞

「学校体育における測定と指導をめぐって」　萩野忠則氏

① 統計思想と体育測定について

実例 (1) マラソン（毎日の持久走）の効果の検定　x^2 検定の利用例

実例 (2) 体育測定における百分率の扱い方。百分率のための表の利用例

総括　検定や推定の基礎にある考え方・統計思想

② 体育の測定と活用（体位評価の科学的方法）

(1) からだがよいとはどんなことか

(2) SS という表わし方の意味

(3) 発育度の評価

(4) つり合いの評価

(5) 体型（形態的健康度）の評価

性格と体型、運動適性と体型

(6) 成熟度の評価

＜芸 術 分 科 会＞

われわれをとり囲む環境はどうであろうか。高度の科学技術が進歩し、都市集中化した機械的な人工環境の中で、生徒が受動化して類型化し、主体性を失っているのではないか。このような中から、自分の意志を表現する創造性が喪失していく背景があるのではないか。生徒は仲間と行動を共にしながら、その中に彼らの内的欲求としての仲間とは異った個性と創造性を持ちたいという欲求があるのではないか。その人間性の育成は高校の芸術創造の教育によって形成されることを強調する。その創造性の開発については自分自身を環境造りに直接参加させることによって生徒本来の創造性をひき出すことができる。

スライドにより校舎の壁画や階段の踊り場のデザインを授業の中に取り入れ、実際に作品化していく過程を明細に映写して説明があった。

＝続いて質疑にはいる＝

1. このような発表は貴重な内容である。生徒の目的と建築物に参加表現させることは自己のエネルギーを発揮させる要素となり大変良いと思う。

2. 現社会においては高度の生産技術や教育の中に美術工芸が密接を持っている。そうした面で高等学校の芸術科のありかたが大きな問題になる。特に現行カリキュラムについては難点がある。家庭科との結連で男女共学制度が崩れ女子が芸術を選択できないのは困る。

3. 現行カリキュラムについては時間数の不足が一層芸術教育の貧困をまねいている。なんとかして6単位男女共必須としたい。

4. 芸術部会の充実を計り、会員間の交流を計り四科相互間共通の問題を明らかにしながら、芸術科本来の役割を周囲の人々にも理解を深める働きかけをして行かねばならない。現実の問題として専任の芸術科教員が減って行くことは大きな後退である。カリキュラムと同様教育の谷間にならないようにすべきである。

「芸術教育の創造性の開発」 講師 平 賀 瑛 彬 氏

ペスタロッチが「創ることが、より密度の高い観察力を育てる」といっているが、鑑賞についても、実際に創作させることが、より良い鑑賞の基礎を作り出すのではあるまいか。

建築や、彫刻などにおいても、まわりの環境や、場に調和したものが本物であろう。外国などでは、多くの広場にある彫刻などはまわりの環境に全くとけこんでいるものがほとんどだった。

日本の作者の中には、新奇で、めだつこと、外面にとらわれて、新しい、飛躍したものの方法だけを取り入れて、内容がともなわないことが多い。それが有名になり、立派だとされる道につながっているからである。有名だということと、立派であることの錯覚があるからである。そこで、問題をミクロ視することと、マクロ視することの橋わたしが必要になってくる。それによって、直観が養われ、本物を見分ける心眼が育てられる。

皆んなが理解し、親しめる平易な素材で、人々の生活の中にとけこませることが本当ではないだろうか。その橋わたしの問題の中で、グループサウンズ等の禁止は、最も稚拙な方法だと思う。それは数多くのものを実際にやらせた上でないと本当の意味での価値感が鮮明にはならない。それは楽器の種類で価値の違いを認めたり、ソロと伴奏で上下を考えたり、虚栄のための音楽や、常に段階をつけて考えることと同じくまちがいである。本物を作り出すためには、それを育てる土壌がいる。外国では、ごく普通の家庭の中でも、下手ながらも伴奏をひき、すぐ合唱するような土壌がある。

創ることが、実際にやることが、より多くの鑑賞眼と批評眼を作ると云えよう。

日本での教育レベルは世界に誇れるほど高い。しかし、それは保護過剰を生んではいないだろうか。与えられたものだけ知って、与えられない物は知らない。これがネックになって、物の考え方が似たり固定観念になったりする。その為、本当の意味での自分の主張がなくなる。教育することの本当の意味は、知らせる、アドバイスすることではなかろうか。

＜英語分科会＞

講 演

東京外国語大学助教授 斎 藤 次 郎 氏

「これからの英作文指導」と題されて、実例をあげながら、有益な講演が行なわれた。次に論旨を要約してみる。

最近英語の四つの技能のうち、話す、聞く方面には進歩が見られているが、書くことには、あまり熱意が見られな

い。そこで次の3点について考えてゆきたい。

(1) 語と語の結びつき (collocation) について

これまでは辞書的なもの、たとえば look into, look over, consist in, consist of. などが指導の主体をしめていた。しかし、辞書を調べてもわりにくいもので、重要なものがある。これは日本語——英語の関連で理解しにくいものであり、次のようなものがあげられる。

<形容詞+名詞>の例

安い給料	×	cheap salary
	○	small salary (low)
濃いお茶	×	thick tea
	○	strong tea
大きなまちがい	×	large mistake
	○	big mistake (serious)
黒めがね	×	black glasses
	○	dask glasses
せまい部屋	×	narrow room
	○	small room

<動詞+目的語>の例

ダンスパーテーを開く
hold a dance
(give)
(throw)

クリスマスをする	celebrate Christmas
橋をかける	build a bridge
詩を作る	write a poem
バラを作る	raise roses
薬をのむ	take medicine
香水をつける	wear perfume

これらは<動詞+前置詞>と比べ、今迄重要視されることが少なかったが、大いに関心を持つべきだ。

(2) 相 (aspect) について

「私は服を着ている」を英語になおす時 putting on〜の形を使う誤りが多い。これは「着る」という瞬間相と「着ている」という継続相を混同している。wear, be wearing, have on, be in, などの形を使うべきだ。「乗物に乗る」が get on〜, get into〜等で、「乗っている」が be ridng on (in)〜, be on〜等であるのもこれと同じ相の問題である。

(3) 文体 (style) について

今迄はとかく文法的正確さを強調するあまり、文語と口語の混じった奇妙な文を作ってしまう誤りが多かった。生徒に明確な区別を教える必要はないが、口語的な例を先に覚えさせるとか、文語・余りも口語すぎるものを production の面では避ける配慮が必要である。

○研究発表

(1) 英語学習における動機づけの実態について 風蓮 金津豊文

(2) 音声面を重視した動機づけ 遠軽 石前隆勇

(3) 米国の高校に於ける外国語学習の実状と本校に於ける英語学習の効果的動機づけについて 旭川東 薄 孝三

○特設授業

月寒高校の辻先生により、英語クラブ(生徒21名)の活動が紹介された。説明に10分、授業に40分として次の3つのことが行われた。

① Conversation Game

やさしい会話の問答を交互に行なう。

② English Proverd Game

30程の英語の諺を暗誦させておき、上の句を読み下の句を言わせる。

③ “Guess it„ Game

テレビの連想ゲームをまねたもの。ヒントにより単語をあてさせる。

以上の3つについて、各々得点を計算し、男女2チームでその勝敗をきめる。

＜農業（第一）分科会＞

＜研究発表＞

「施設設備の近代化にともないその活用上の諸問題について」

倶知安農　岡　垣　　栄

昨年度の本研究会に引続き、今年は総合実習実施上の問題点を検討し、特に宿泊実習び当番実習にしぼり、アンケートに依る各校の実状と、そのあり方と問題点を検討することにした。

1．宿泊実習のあり方と問題点について

宿泊実習は大部分の学校が実施しており、その目標が完遂されているが、一部では、人間教育は現在程度の期間では不充分と云う意見もあった。

○今後の対策について

目標の具体的なものを明示し、生徒に徹底させる。その達成度については有機的なもので表すことが望ましい。例えば日誌やレポート等。

2．当番実習についてそのあり方と問題点当番実習についても各学校が実施して居り、その目標は技術教育（管理記録）に重点がおかれている。然し精神面に重点をおく学校もみられた。実施期間は春〜秋の農耕期間に毎日交代が多い。

◉対策について

現状で可とする学校が多いが、次の様な意見もあった。

受入体制の細密な計画と実施についての配慮が必要、クラブ活動の圧迫、助手の資質向上、専攻制をとる場合当番実習との関係配慮、連絡の徹底と計画の充分な研究検討の必要、総合学校では農業教員少く困難多い。

3．質　疑

各学校よりの意見をまとめると次の通り。

(1) 宿泊実習の基本的ねらい

宿泊実習は、人間教育に重点を置くのか当然で、もし日中出来ることなら日中行うべきだ、然し授業内容に出てこない面や教師を生徒の交の中に意義が見い出される。

(2) 班編成について

3年生を専攻性にして各班1名づつ、1〜2年生は各6名の班にして実施するとお互に勉強と意欲が出て良い。

(3) 炊事について

農業科と生活科の組合せで実施しているところと男子生徒の自炊が多いが、炊事婦が必要である。又、食費について原則として自己負担にすべきである。

(4) 指導人員について

助手の質的向上のため、全道的交流、又、研修が必要である。技術指導及宿泊等も助手でも良いが、あくまで責任は教科担当教師が取るべきである。

(5) クラブ活動及び関連学科との関係

時間内で単位に入っているものは、当番実習が中心に取り上げるべきである。又関連学科と自営学科は、計画を密にして、共存する様に進めるべきである。

(6) 総括質問

施設々備について、1学科2間口は基準は全部1律で無理がある。然し現在の基準は2〜3年は改正されない。細目変更を早く出さなければならない。文部省も大巾に出すと云う。設備の30％であるからこの点考慮することが必要である。

4．助言者総括

実習の効果は実践の中に出ている。然し生徒がどう身につけているか、これを評価しなければならない。実習のねらいは集団の中の個人の能力をどの様にのばして行くかが問題である。助手の研修は常に考えているが、なかなか出

来ない故、種々の研修会や特定学校の施設設備を利用して高めてほしい。学習要項はまだ不明であるが、全国1律は無理である。そこで本道では中味の指導方法は、どうあるべきか、相当思い切った事が進められると思う。本道産業をとらえ生徒の指導をどの様にするか、今回の資料をもとに研究して欲しい。

＜農業（第二）分科会＞

「定時制農業科の保持する施設設備の活用上の諸問題について」

南幌高校　芽室高校

討　議

(1)　実習助手の定着化と人選について

事務兼助手であったり、町の職員であったりして正式な職員が少なく、産振手当もついていない者が多い。人選は校長が行っていると実状報告があった。……豊浦、中頓別、壮瞥、恵庭北、愛別

(2)　施設設備に関して

実験実習の設備も不足であるが、指導する先生も不足である。然し専門教科も多く、その理解の為めにも又、ＨＰ指導の為にも施設設備を充実し、必要であるし指導人員も増して欲しい。……芽室、鷹巣、北竜

(3)　活用上の問題と対策

動力稲刈機を入れて1日実習をしたり、収量調査をしたり、農学実験室で土地改良の調査をしたりして活用して居る。……鷹巣

(4)　助言者より

実習助手は必要なので、道でも町村長と協議して配置を呼びかけている。平衡交付金に含まれて居るので、法の改正の声もある、定時制一丸となって資料を集め伸して欲しい。

施設設備に関しては地域の実態と現状を考えて何が必要か、全校的共通理解をもって限られた予算を研究することだ、そして効果を示して欲しい。実験実習は公費で行うつもりである。

ＨＰ巡回指導は公用車であること。自家用車は借上手続を踏んだ上でなければ困る。

巡回はその教科目担当者の教育活動なので旅費規定により支出される。普通教科の先生は家庭訪問として一般旅費を当て居る。片道25km以上では宿泊してよい。

産振台帳による費目の変更は若干認められる。価格も3割前後の幅がある。

学校農場の一部を農業クラブに委託する事は可能である。経費収穫物については設置者話し合い、又規定もある。

中卒者減少で再編成も運んでいるが、昨年当りから町村立の施設設備の進んだ学校も増えた。なくてはならない学校だと見留められる事が大切である。

講　演

「西欧の農業教育」　　講師　北海道教育委員会指導主事　**蔀　　亘**

国際農業教育セミナーに参加のため7月25日出発、9月3日に帰国したが、道内教職員の協力を感謝すると共に、一応の報告を致したい。

農業教育の動向を見るとは、教育全体の動き、又、農業の動きも見る必要があるが、ヨーロッパ全体の教育の動きとしては、(1)　義務教育の延長と、(2)　高等教育の拡充が問題となっている。この中間にある後期中等教育も問題であるが、複線型をとっている西欧では、わが国のような単線型と比較して、どこを後期中等教育として取り上げるかは明確でないが、教育制度の方向としては単線型を目指している。

西ドイツ（11州からなり各州独自であるが、連邦教育会議で基本を定める）では、満6才で小学校に入学し、4年を終って試験の結果それぞれの方向を定める。

(1)　ギムナジウム。一般教育が主で卒業時（19才）に大学入学の資格試験を受け、大体大学に進学する。約17%。

(2)　実科学校（中間学校）。中級の事務職又は技術職の養成で、10%前後。

(3)　国民学校（上級）。残りの70%位は国民学校の上級課程に進み、卒業後働きながら職業学校で教育を受ける。3カ年で義務制になっている。従って職につく者は結局12年間が義務教育の期間となる。

義務教育の延長には、このような方法と、教育体系の中で延長する二つの方法がある。西ドイツのもう一つの教育の問題である高等教育の拡充については、上級の職業学校を終って大学へ進学できる第二の道を開いており、10%前後が該当する。

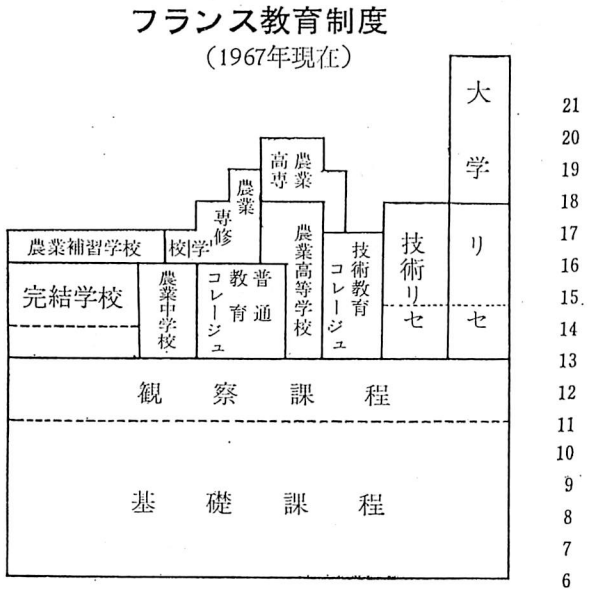
次に西ドイツの農業教育を概観する。職業学校には週1回、年間40回通い、1回7時間、3年間に840時間で、日本の定時制に相当する。この間2カ年は自分の家で、1年は公認の農場（マイスター農家）で実習し、卒業時にゲヒルフェン（云はば農業助手）の資格をとる。その後18才から25才までは自家で営農体験を積み、その間冬期学校で2冬34週の教育を受けて、25才でマイスターの試験を受ける。合格すればマイスター既ち、指導農家の資格を持つ。

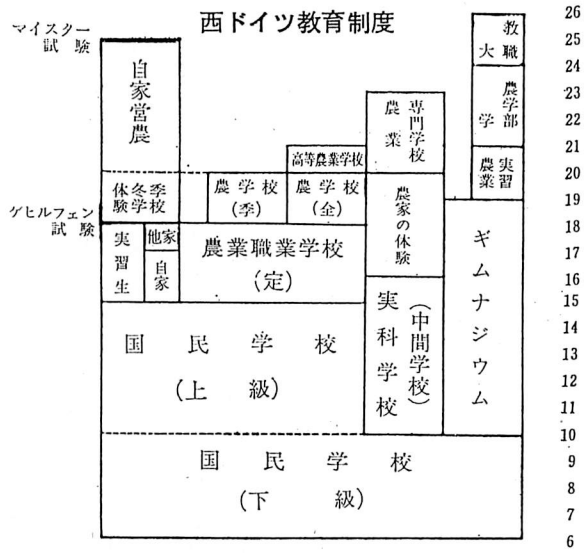
女子ロレールヘルフラウの資格であるが、職業につきながら勉強し、各種の資格をとれるのが西ドイツの特徴である。学校教育は日本が進んでいるが、職業教育はドイツが進んでいる。実科学校を終って、或いはギムナジウムを終って専門学校や大学に進学する場合、すべて農業の経験がなければならない。日本と異なる点は、学校の生徒数が少ないことで、1学級20〜25人位。全校生徒60〜70人で専任の教員も少なく、特に普通教科はその時に雇用する。冬期学校は農場を持っているが、モデル農場としてで、生徒の実習は行わない。

フランスの教育について。1959年のベルトワン改革によって、教育制度が改革された（対象は公立校）。注目をあびているのは、観察課程で、5カ年の基礎課程の後、11才より観察課程に入り、2カ年の間にリセに入学する者を決定する。リセに入学後、さらに2年観察期間（計4年）をおくように改訂されている。実状はよく分らないが、改革案どおり必ずしも実施されていないのがフランスの現状である。

西欧農業教育の始まりは、やはりデンマークであると思う。農民運動がその出発である。中等教育の段階ではその後、国民高等学校が人間教育を中心に発達し、冬季学校は、第一次大戦後に生まれた。農業教育で今後学ぶべきなのは、普及活動より出発したアメリカの農業教育であり、プロジェクトを中心に学校教育に発展している。プロジェクトの方向もプログラミングの学習が取り入れられ、生産プロジェクトから将来は生産農場まで発展してゆく。この様な意味で教育の中味はアメリカが進んでいるように思うが、西欧の農業教育と共に学ぶべき点である。

今後道でも農業教員のグループによる長期研修を考えている。それには語学の勉強が殊に大切である。





＜家庭分科会＞

講　演　「家庭と電化」　　講師　北電　橋　本　英　寿　氏

1．契約容量の決め方について
　○電機器具の換算容量
　○家庭用の器具がどの様に使われているか
　○時間によって使い方が違うことについて
2．　1KWHの電気の働きと1カ月の電気料金について
　○電気器具は10円で沢山の仕事をする
　○消費電力量の簡単な計算方法
　○起動電流について
3．家の大きさと安全器の数について

講　演　「電子レンジについて」　　講師　東芝商事　安　藤　利　雄　氏

1．電子レンジの沿革
2．電子レンジの利用台数
3．電子レンジの加熱原理
4．電波の性質
5．浸透の深さ

6. 電磁波について
7. 電子レンジの効用　長所、短所

講　演　「被服材料について」　　講師　北海道工業試験所　**北　川　誠　二　氏**

1. 繊維の種類
2. 繊維の性能と用途
3. 繊維製品の加工法について
   ○主な改質加工法　○特殊加工による被服材料

○食　物　部　会

講　習　「電気調理器具の使用法」　　講師　藤女子短大　**伊　藤　弘　子　氏**

1. ピラフのたき込み御飯
   ○たき込みの混ぜ御飯は、なかなかむづかしいものですが、電気釜を使用しての洋風たき込み御飯です。
2. シュークリーム
   ○電気天火使用による、ガス天火より、温度の調子がよいので出来上りが良く、天火内の上部と下部の温度調節ができます。
3. 什錦魚捲
   ○電子レンジを使用して、厚みのあるものを食品の中から分子の摩擦熱で加熱され、2分間のセットで出来上りました。
4. 火　鍋　子
   ○テフロン加工の美しい電気鍋を使った温かい鍋料理です。温度調節に気を使わず又材料の下ごしらえは、電子レンジを使用して、短時間で準備が出来ました。最初鍋の加熱は100℃でセットして煮えてからは70℃で保ち、食べやすい温度です。

○被　服　部　会

講　習　「被服材料指導資料製作」　　講師　ライオン家庭科学研究所　**山下せつ子　氏**

1. 繊維の鑑別
   ○燃焼法による繊維の鑑別
   ○呈色反応による繊維の鑑別
   ライオン鑑別染料A液（紫色）
   浴比　30：1 ｛布の目方 14.5g／(10cm×10cm)×12種類／液量　440cc｝
   濃度　1%（4.4g）
   処理　沸とう後5分染色　充分水洗い、乾燥
   ライオン鑑別染料B液（0.5%溶液）＋C液（0.25%溶液）Aに同じ
2. しみ抜き
   ○しみの種類6種について、処理方法、結果観察
   どちらも実習出来ず示範だけで終わらす。

＜工業分科会＞

講　演　「学習のプログラム化の方法とその評価法」

京都市立洛陽工業高等学校　教諭　**山　本　　績　氏**

○講演要旨

現代日本における過度の学歴尊重の風潮が空前の教育ブームをおこし、ひいては学生、生徒の能力多様化をもたらした。教育制度そのものに欠陥があり、改善すべき点があるように思うが、いたずらに功を急いでは混乱を招くのみである。教育は現実に即して行わなければならない。また学習の目的は評価にあるのではない。結論の記憶のみに止まらせることなく創造性の涵養に意をもちいるべきである。多様化された学習者に対して能力に合った教材を与え、たえずその理解度を把握して次の段階に進むことが学習意欲の昂揚につながる。

以下標題の実際例についての解説。

研究発表

○学習における学習の近代化の一方法

——容量分析のプログラム学習——　　旭川工　品　川　三　雄

工業化学科における実習において、現状の一斉授業では、その学習目標に生徒を到達せしめることが不可能な状態である。そこでその一解決方法として実験実習の基礎であり、しかも応用範囲のひろい容量分析のプログラム学習テキストを製作し、これをもとにして実践した内容についての報告。

○学習的教科内容を実用実務的に取り扱うための一考察

室蘭工　桝　田　勇　起

電気系学科の中で電気理論、電子現象、自動制卸等は数学的解析によって主題を追究する場面とか、高度の物理、化学の知識をもとにして、演繹的解析をはかる場合が多いが、最近生徒の個人能力の格差や全体的な資質の低下から従来の指導法では学習の効果をあげることがむずかしくなってきている。そこで、学理的教科内容をもっと実用実務的に指導する方法 ——その実現性—— そして、それらの問題点は何か。こういった事項についての概括的な考えの報告。

○教材スライドによる一斉指導

——土木応用力学「はりの断面力」について——　　帯広工　三　城　雄　典

レディネステストにより生徒のレディネスを調整したあと、自作スライドにより学習をすすめ、その間生徒のレディネスに応じて適当にコミュニケーションの強化をはかり、併せて質問練習シート等によってその反応を確め強化する。それによって生徒の個々の反応を一斉指導の中で確認強化でき、コミュニケーションの強化により個別学習をたすけることができると考えそれに関する実践報告。

○北洋における漁船の着氷について　　小樽工　岩　永　正　敏

最近日本沿岸の水産資源が乏しくなり、四季を通じて漁船の出漁範囲がますます広くなる傾向にある。これに伴う海難事故が多発し、その中に船体着氷現象が原因と推定される事故があるが、その防止対策の一つとして、「北洋漁船の設計方針」という立場からの研究報告。講演者、研究発表者に対する質疑応答。活発な質問多数。

＜商業分科会＞

始めに島田部会長の挨拶のあと、小樽商大教授伊藤森右衛門氏より「経営学の新展開一意志決定とリーダーシップ」と題する講演があり、経営の側から経済を見る主体的見方の必要性と創造的リーダーシップの重要性が説かれ、又、経営とは意思決定の組織であり、リーダーシップが悪ければ適確な意思決定も生れて来ない事を最近の経営事例を例に興味深く説明され、最後に電算機の意思決定に果す役割にも触れて参会者に多くの示唆を与えた。

続いて主題「北海道に於ける商業教育の多様化と、商業教育に於ける女子教育」について、5校より研究発表が行われた。

（小樽商業）より「商業高校の教育課程は、いかにあるべきか」について、前回第5回に続く第2報として報告が為された。これは前回以後の客観的情勢をも勘案して理想案から進んで新年度（昭和44年度）入学生徒のカリキュラム成立までの経過を手続と共に説明したもので、小学科制発足（事務科）という新事態を反映したカリキュラムの発展を行ったものである。

（函館商業）よりは「本校の貿易科について」と題し、全道にさきがけて小学科制として発足を見た貿易科について設置の経過から教育課程、指導計画等につき詳細な説明が為され、特に入学者の状況、学力状況には多くの興味が示された様に思われた。

以上2校の発表に対しては、特に（小樽商業）の教育課程に質疑が集中し、

イ　「経済」を必修にした理由

ロ　「経営」のない理由

ハ　女子教育への配慮の有無

ニ　「簿記会計」科目編成上の問題

ホ　「文書科」と「事務科」の差異　等々

の活発な質疑応答が為された。

午後より司会者交替して、主題「商業教育に於ける女子教育」について3校より研究発表が行なわれ、

（室蘭商業）より「本校に於ける女子教育について」現行の男女それぞれ中心の教育課程を改め、少数科目大単位制に移行する為の各種の検討を行っている旨、詳細な資料と共に発表された。

（様似高校）よりは「本校商業科に於ける女子教育についての一考察」と題して、商業科への学科転換以後（42年）急増した女子の教育について、地理的特殊性を加味した豊富な資料と共に説明された。

（芦別商業）よりは「本校の女子商業教育」と題し、全道一高率の女子教育（43年入学者90%）に関し、2つの目標（① 少数科目大単位制。② 技能者教育の推進）を掲げての説明がなされ、特に「何かが出来る」実務者の養成と、

「何かをやろうという意欲」のある産業人の育成を目指している事に多大の共感を覚える向きが多かった。

以上3校の研究発表に対しては、資料としての各校の教育課程に関する質疑が大部分であった。

以上各校の発表を終えて、助言者より夫々次の助言を頂いた。

（中村氏）

(1) 多様化に関して、教科科目の「枠」をはずして教育課程を考えたのは結構である。

(2) 女子教育に関し「女子の特性」を強調するのは疑問である。

(3) 発表資料には年月日を入れよ。

(4) 「課程」とは全日制、定時制、通信制以外はない。
「商業課程」というものはない。

(5) コースは「類型」と表現すべし。

(6) 施設設備の問題よりも指導法が大切である。

（横川氏）

(1) 多様化にも色々問題がある。

(イ) 小学科制には2つの態様が現われている。

(ロ) 少数科目大単位制の検討。

(2) 新設科目の研究をしよう。
事務機械、事務科、簿記会計ⅠⅡⅢ等。

(3) 女子教育について――我々の問題は、商業教育に於ける女子教育である。

(4) 「商法」「経済」「経営」は、限定さけた単位数では、性別による履習も止むを得ない。

最後に中村氏より全道商業科の女子比率の発表あり（全体では68.2%）。

＜水産分科会＞

講　演　北海道における浅海増殖と沿岸漁業について

（元北大水産学部長）　田　村　　正　氏

北海道第2次開発計画は工業が主で、水産は他産業に比し後退している。北海道は動物蛋白の供給源として重要な位置を占めているが、沿岸漁業従事者は経済的に恵まれていない。

遠洋の国際状勢も緊迫しているので、沿岸漁業をもっと重視すべきで増殖を考えなければならない。浅海・内湾こそ生物が最も多く生息する所であるが、 北海道における浅海養殖は遅れており、 カキの養殖は全国の0.8%、ノリ0.1%、ワカメ5.0%が実情である。

北海道の養殖に適する水産物はホタテ、ホツキ、コンブ等であり、これらについて他府県の踏襲でなく、北海道特有の養殖を考えるべきである。幸い北海道は栄養源（海藻、プランクトン）に恵まれており、養殖によって更に生産力を高めるべきである。海を育てること、海を開発することが沿岸漁業の明るい見通しとなるものである。

この後、北海道におけるカキ、ホタテ、ホツキ、アワビ、ノリ、ワカメ、コンブの養殖についてのこれ迄の経過、現状、問題点、そして将来これらの養殖、増産方法について講演された。

○研究発表

(1) 水産教育の多様化と漁業後継者の育成について（特に本校における沿岸漁業コースの再検討）

（函館水）　土　田　映　二

1. 本校生徒の漁村出身者の現況について
2. 沿岸漁業コースの現況について
3. 本校漁村出身生徒のアンケートについて
地域水産業の振興をはかるための実質的担手を養うことと、沖合遠洋漁業の従事者を養成することが責務であり、良い方向へもっていきたい。

(2) 今後の水産増殖科のあり方について　（小樽水）　小　林　照　則

1. 水産増殖科の背景としての水産増殖業の現状と将来について
2. 入学する生徒の能力、適性、進路の問題
3. 今後の本校水産増殖科の在り方について

(3) 水産製造科における化学学習の指導について　（厚岸水）　工　藤　　豊

1. 化学学力実態調査
2. プログラム学習
3. プログラム学習法とグループ実験法との比較

○研究発表に対する質疑

1. 漁業後継者の現状及び養成について
2. 漁村出身者以外の生徒の進路指導について
3. 海技試験について
4. 増殖科における冷蔵冷凍の位置づけについて
5. プログラム学習の内容及びテストの実施について

○研修報告

(1) 産業教育実技研修報告（機器分析について）　（小樽水）　石子博敏

(2) 昭和43年度産業教育指導者養成講座研修報告　（厚岸水）　滝川茂登

◇事務局より◇

研究調査の申込みについて

研究調査の申込締切は従来7月末日でしたが、44年度は全体の事業計画の進行上44年4月末日と変更いたしますので、下記要領により支部、教科で希望がありましたからとりまとめ提出して下さい。

○範　　囲：各教科及び教職一般。

○方　　法：個人又は共同研究。

○申 込 先：教科関係は教科事務局、教職一般は各地区支部事務局。

○申込様式：自由ですが主題、担当者、所属学校、調査内容の要約、調査期日等を含めて下さい。

○43年度より継続のものもありますので、希望が多い場合には、次年度にもちこす等の方法がとられることもあることを御了承下さい。研究調査の結果は原則として研修紀要に発表を御願いすることになります。